



ご挨拶

水澤雪下ひとり雑誌

雪下

第三十二号

2023/02/26 発行

題字：高橋弘美

今月はあまりまともなものが書けそうにない。二月十四日、祖母が九十七歳で死去した。人生百年時代などというが、実際には百歳に達することのできる人はなかなかいないという。やはりそのようである。

祖母は施設に入って七年になる。認知症が疑われ出してからはもう十五年近くになるだろう。つまり、こんな云い方もなんだが、まっとうな祖母との関わりはもう十年以上絶えて久しい。実質十年も前に祖母を失っているようなものだ。

とはいえ祖母の死は、やはり祖父の死とはまったく意味合いを異にする。祖父の場合、これは父方のも母方のもそうであるが、たとえば絵を見たり描いたりするたびに、ふたりとの血のつながりを感じるのである。うちには祖父の美術書があるし、祖父の残した墨や絵の具もある。そうしたものを通じてわたしは祖父を偲ぶことができるわけだが、祖母の場合、そういうものがなにもない。わたしはこれに立ち向かわねばならないのだ。そのことがわたしをおののかせている。女の一生とは結局なんなのか、どうも考えこんでしまうのである。

今号の内容

女の生と死

後記に代えて

女の生と死

どうしてわたしは祖母の好きな食べ物を知らず、祖母の趣味を知らず、祖母の好むものをなにひとつ知らないのだろうと、このところ毎日考えてばかりいる。それほど祖母という人は自己主張をしない人だった。

と云って、では自分のない無色透明みたいな人だったのかというとそんなことはないので、かなり自我の強い人だったことは、祖母と深くつきあったことのある人なら皆知っているのである。この場合の自我が強いというのは、わがままだとかきかん気が強いかいという意味ではなくて、言葉そのままの意味で自我の強度が強かった。

世の中には愛情深いゆえに愚かな女というのがいる。我が子のためというと、すがれるものにはなんでもすがってしまう、どんな荒唐無稽な話にも飛びついてしまう、という人が結構いる。ことに我が子の命が危ないなどとなると、もう身も世もなくとり乱し髪ふり乱して、乞食だろうとお札だろうとお光

り様だろうとすがってしまうというような人がいるものだ。少し昔の本など読むと、女というものはそういうものだと思われていたふしさえある。

その点、祖母は実に頑固な人だった。他人を決して信用せず、安易に人の話に飛びついたりもしなかった。祖母の長女は（わたしの伯母であるが）体が弱く、赤ん坊のとき、もう助かるまいと云われた。いよいよあぶないというので、近所の人がやってきてあれこれ云う。あのご祈祷は効いたとか、どこそこのお札は効果があるから持ってきてやるとか、くだらない助言を大真面目にしてくる女が大勢いる。葬式の段取りを得意になってはじめる者もいる。祖母は腹が立ち、あんまり腹が立って、できることからその場で声を上げて全員蹴散らしたかったろうけれども、黙って耐えていた。そういう人だったのである。

思うに、祖母の我慢強さと頑固さとは同じところに根ざしている。人によって、それを理性と呼んだり自我と呼んだり我といったりいろいろ云い方はあるだろうけれども、ともかく祖母の中には頑とした岩のように固い意地の塊のようなものがあって、それがいつも根つこのところで祖母を支え動かしていったように思うのである。意地、気骨、負けん気、根性、土性、骨というような言葉で云わんとするところのものが、ともかくも祖母の中に頑と居座っていて、それが人をむやみに信頼せず、安易に情に流さ

れず、人の底の底まで見ているような、冷徹な目を祖母に与えていたのに違いない。

ところが、祖母を知る人は一概に「あの人は優しい人だった」と口をそろえて云うのである。それは確かにそうなのだ。苦勞してきた女の常として、人の業や悪辣さを知りぬいており、他人を絶対に信用しなかったけれども、同時に人の心細さや寂しさのようなものにも敏感だった。そして黙って手を差しのべることができた。

大正の農村生まれの人だから、認識の根底に、人は互いに譲りあい支えあわねば生きてゆかれないという考えがあったのに違いない。この時代の人たちは、いまのわれわれとはまるで別の社会に生きていたはずである。物資や情報の獲得が生死に直結する問題で、部落の人間関係がそのまま生き死にを左右するような、そういう社会に生きていたはずである。

農家に月給などない。新米ができるまで買ひ物は皆つけ払いである。アマゾンはないし宅配サービスもない。なにか必要になれば、人から買うか借りるかしなければならぬ。アマゾンは顧客の人格を認識しないし、そういう意味では差別もしないが、人が人からものを手に入れる場合には、相手によく思われていないと、なにかと不利益を被る。

処世術とはすべて、共同体の中で人に好印象を与え、おのれの立場を有利にするための手段にほかならない。なにかを手に入れるためには人を介するし

かなかった時代、外部の委託サービスなどなく、なにかも自分たちで、共同体でこなさねばならなかった時代、人間関係は死活問題だった。我を通すことは危険な行為であり、おのれを貫くことは生死に直結する賭けだった。一方現代のわれわれは、自分らしくあれと推奨される。自分の欲望を解き放ち、自分の思いを貫き、自分のやり方を確立することがよいことであると云われる。それは実に経済と生産関係との問題だが、祖母のことを思うとき、この点で隔世の感を抱かざるを得ない。

祖母のような女を生むのはひとつの時代とその時代の経済形態とである。祖母が現代に生まれていたらとすれば、おそらくまったく違った人生を送ったに違いない。祖母は自分の鉄のような意志を貫き、何ごとか為したに違いない。祖母は非常に意志的な人であって、合理的な頭をもっていた。こういう人間がこの世でなにかを為すわけだが、祖母はその尊い意志と合理性とを、おのれ自身という頑固な存在を押しえつづけるのに使い尽くしたかに見える。

これがわたしを無性に腹立たしい気持ちにする。いくら封建的農村社会であっても、男にはまだ社会的におのれを表明する機会があった。男ならば寄合で意見を申し述べたり、なにかしらの職業に就ける可能性があった。ところが女には、ことに下層階級の女にはそうした可能性がほとんどなく、その人生は結婚適齢期になれば父親とは別の男の手に委ねら

れた。この男があくどいやつだったり、生活無能力者だったりすると、もうおしまいである。こうしたことが長く大方の人類の歴史だったとは、いったいどういうことなのだろうかわたしは云いたいのである。あろうことかそれはまだほんの半世紀かそこから前まで、確かに現実であり、この社会を支配していたのである。そのことをどう考え、どう感じたらよいだろうかわたしは云いたいのだ。そしてそれを受けて、否こんなものを背負って、祖母のような無数の女たちの群れを背後に感じながら、われわれはどう生きていたらよいのかということが云いたいのだ。

祖母が生まれ育った社会はもう崩壊しているわけである。おそらくもう元には戻らないだろう。人は面倒な人間関係をふり切って生きられるのなら絶対にそちらのほうを選ぶ。そのために人は技術を発達させてきたと云ってよい。これは人間の努力の隠れた、そしてもっとも強力な動機のひとつに違いない。うんざりするような人づきあいから逃れ、必要なものはネットで買って、配達員に届けてもらうような生活（これも最近顔は合わせてハンコを押さないでもよくなりつつある）、親戚づきあいもせず、近所づきあいもなく、仕事と冠婚葬祭のときだけいややながらも人と顔を合わせるような生活、やりたいたいはだいたいの実現できるような技術が存在し、少なくとも表向きは人目を気にせず自分というもの

を存分に打ち出してよい、インターネットなる仮想空間にも恵まれている。これに豊富な財力が加われれば、もう他人など少しも必要でなくなる。金持ちは傲慢になるのではなく、他人の援助が必要ないので人をおもんばかることをしなくなるのだとは、まったく至言ではないか。

それで、水呑百姓だった祖母の一生とはなんであったか。嫁いだ男は馬鹿でなく気骨のある人だったが、妻に対しては肝心なときに専制的になるよりほかの接し方を知らなかったように見える。祖父もまた一面情の深い人ではあったが、わたしには祖母に対する祖父の無意識のおそれが見えるような気がする。胸の奥深くに人知れずなにか劣等感のようなものを抱えていたらしい祖父にとって、頑として揺るがぬ自我をもった祖母はどんな女に映ったか。それがどれだけ祖父を支え、またおののかせたか。祖母はそれを知っていたか。そうだとしたら、その胸のうちはどうなであったか、自分の人生というものをどう思っていたか。あるいはそんなことを思うという近代的な、自己中心的な思考さえなかったか。

結局、ひとりの人間の一生について、それが一体なんだったのか、なんの意味があったのかなどとつらつら考えるのは、内省的といえは聞こえはいいが、後ろ向きで未熟な、自意識過剰をもてあました人間の自慰に過ぎないのかもしれない。そんなことはこつちだって百も承知で、それをやるのがひよつと

すると祖母の人生そのものに対する侮辱にはし
ないかとも、わたしはおそれる。わたしの見方で人
を見ることは、あるひとりの人間を、わかるように
するためにかえってわからなくさせることになりは
しないか。そこにうぬぼれやはなはだしい勘違いが
紛れこみ、滑稽を通り越したものになりはしないか。

こうしたすべては、結局のところ対象をばかにした
行為ではないか。存在を存在として受けとめるので
なくその解釈を持ち出すようなことは、結局のところ、単に存在を受け入れる勇氣に欠けるだけのこと
ではないのか。世界を生きる人間と世界を解釈する
人間とのあいだに存在する、なにか動かしがたいス
ケールの違いのようなものはなんだろう。

ここまで考えてきてふと、祖母を想うことは、世
界を想うこと、存在を想うことそのもののように思
えてきた。祖母は料理であり、手のひらであり、尻
であり、胸であり、がに股の脚だった。祖母はおや
つであり、ジュースであり、看病の手であり、炊き
上がった飯だった。こんなものかとわたしは思う。
祖母はこんなものなのかと。それが無性に腹立たし
いのだが、だがそのこんなものを、ほかにどこで得
られるか。それをこんなものとは何ごとか。

それらは皆どうしようもないほどこの世のもので
ある。この世のもっともこの世的なものである。肉
体が滅びれば滅び去るものばかりだ。肉体を失えば
無意味になるもの、霧消するものばかりである。わ

たしはそれがくやしいが、このくやしきこそ存在の
口惜しさだ。このくやしきこそ愛惜の最たるものだ。

祖母の料理をもう食べぬ。熱を出して寝こんでも、
もう祖母の手はわたしの額に来ない。わたしはあの
体にじゃれつくことができない。もうあの体を感じ
られない。あの声が聞こえない。それが寂しくてた
まらないのだが、そもそも世界はそうであり、人間
はそういうものなのであった。

自然の異端児たる男があつた。世と結びつき永遠を獲
得していい気になっているとき、自然の最たるもの
でありまったくこの世的な女の体というものが、そ
れはいずれ死ぬものであり永久に失われる運命にあ
るものであることを告げる。いずれにしても、人は
この失意を胸におさめ抱えて生きていなければなら
ない。それが人であるとすれば。

お釈迦様の弟子のアーナンダは、お釈迦様の生前
もっともそば近くに仕えていた人であるが、おそら
く生来の情の深さから、いつまでも悟りを得られな
かった。お釈迦様が明日にも死んでしまうという段
になると、もうたまらず泣いてしまうのであるが、
それをお釈迦様に「これこれ」といった調子でたし
なめられたりしている。情の深いアーナンダには、
人は必ず死に別れてつらい思いをするから、その死
を乗り越える努力をなさいなどは、とてもできな
い相談だったのに違いない。お釈迦様がよいよお

隠れになったとき、アーナンダはこのような詩を作
って心情を吐露している。

その時、わたしには恐怖があつた
わたしの身毛はそそり立った
あらゆる慈悲を具えたまえる
かの正覚者の逝きませる時

わたしはこの場面が好きだ。愛する師の最期を前
にして悲しみ泣き叫ぶ弟子の姿は、修行者が超えよ
うとするものがどんなものであるかを、こよなく明
らかにしてくれるように思われる。

そしてお釈迦様が涅槃に入られ、明日は選ばれた
弟子たちの集会だという日の夜、自分ひとりがまだ
悟りを得られていないことを気に病んだアーナンダ
は、夜通し身を正し思いを正して過ごしたが、明け
方になって寝ようとして横になりかけたとき、つい
に悟りを得たのである。

後記に代えて

これを書き終えて風呂に入ろうと思つたら、本棚
から『莊子』がわたしを呼ぶのである。それでおそ
るおそる開いてみたら、開いたページからもう叡智

がわたしに話しかけてくるのである。たとえばこんな調子で。以下は母が死んで立派に喪に服したと評判になった、孟孫子という人物についての話である。

孟孫子は、なぜ生きているのか、なぜ死んでいくのかなどと、思いわずらうことがなく、生死の後先を考えてそのどちらがよいなどと考えることもない。自然の変化に従ってあるがままのものとして存在し、そのようにして、自分のうえにさらにやってくるはかり知れない自然の変化を待っているだけだ。(中略) その形が変わってもそのために心を傷つけることがなく、肉体が移つてもそのために精神を乱すことがない。孟孫子こそは目ざめている。(中略) 分別を立てて、欠点をあばきたてるのは包容しているのに及ばず、笑いを楽しんでいるのはものごとの推移のままにまかせているのには及ばない。推移のままに安んじて変化のことを忘れ去ってしまったなら、そこで静かな天一の立場に入るのだ。

ほかに、こんなことが書いてあるのを読むと、なるほどと思わず膝を打ってしまう。

自分からその過失を弁解して、足切りの刑にあうべきではなかったという者は多いが、その過失を弁解しないで、もともと足があるべきではなか

ったとする者は少ない。

今後しばらくは、この本にかかずらうことになるような予感がある。こうしたことは実に幸福なことではないか。そしてそれは結局、祖母がわたしに授けたものではなかったらうか。

二〇二三年二月二十六日

水澤雪下

<https://mjibms.com/>



El Greco "Coronation of the Virgin"

死の前日に施設に面会に行ったとき、祖母はもう周りのことがなにもわからなくて、ただ祈るように手を握り合わせてなにかぶつぶつ云っていた。そのときわたしはふとエル・グレコの聖母を思い出したのである。

職員がしきりに写真を撮るように勧めるので、わたしも一枚撮ったが、その写真の祖母はまさにこのようだった。母はその写真があまり本当すぎると云ったが、わたしは撮れてよかったように思った。

人の死にあまり宗教心や宗教的解釈を持ちこみすぎるのも褒められたものではない。だから祖母が祈りながら死んでいったなどと云ったり思ったりする気は少しもないが、その写真にはなにかもっと大きな人間の真実がひそんでいるように見える。ちょうどエル・グレコの描く祈る聖人たちが、人間の真実の一端をあらわしているように。